

国際柔道連盟(IJF)試合審判規定の改正

「正しく組んで理に適った技で一本を取る柔道」の実践に向かって大きな一歩

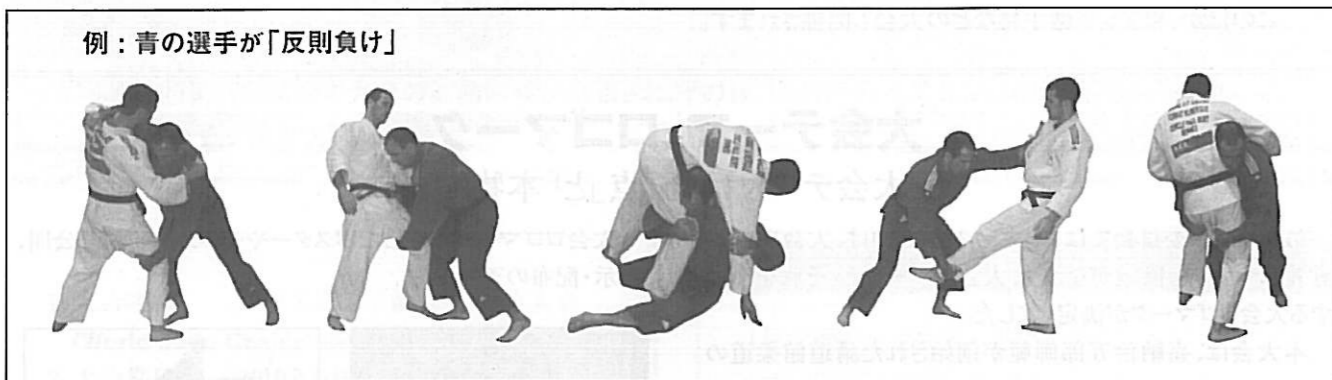
2009年IJF総会で試合審判規定の一部改正案が示され、その後の試験導入期間を経て、12月のIJF理事会において、規定の改正が決定し、本年1月の大会から採用されています。

この改正では、「立技において、相手の帯より下を腕または手で直接攻撃・防御することを禁止とし、罰則は1回目で「反則負け」が与えられる」とされ、これは、「本物」の柔道に向けて

の第一歩となるものです。試験導入期間であった先の「グランドスラム東京」でも、正しく組んでからの一本勝ちの試合が多くなりました。

この改正から半年以上がたつ東京の世界選手権では、各国とも更に、「本物」の柔道を目指して、研究をしていくと思われ

例：青の選手が「反則負け」



「無差別」の試合その意義

無差別の試合は至高の柔道家を生み出す

前回のロッテルダムの世界選手権大会では無差別の試合がありませんでしたが、今回の東京大会では、大会5日目となる最終日に、既に階級別の試合に参加した選手も含めて、各国2名までのエントリーにより体重無差別によるチャンピオンを決める試合が行われます。

柔道の技について、「柔能く剛を制す」の原理がよく知られており、体の大きさや体力の劣るものが相手の力を利用して自分よりはるかに大きな者を投げ飛ばすということに、柔道の醍醐味のひとつがあります。柔道の技は、この「柔能く剛を制す」の原理に止まらず、更に理論的な発展を遂げた「精力善用(精力最善活用)」の原理、すなわち「心身の力を最も有効に使用する」原理に、その神髄があります。体格や体力の違いを超越して相手を倒す技を極めた者が、柔道家の頂点に立つこととなります。

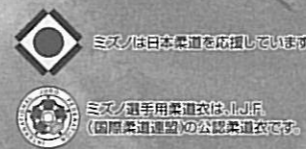
確かに、相対する両者の技が拮抗している場合、体格や体力の差を超えて相手を倒すことはたやすいことではなく、幅広く多くの人々が取り組む「競技」として、体重別に階級を区分してその技の練磨を競うことの意味があります。

しかしこれだけでは、技の原理を極めた至高の柔道家を生み出す機会を失ってしまうことになりかねません。無差別の試合の場合は、至高の柔道家を生み出す可能性の場でもあり、この試合での覇者が、真の柔道王者といえます。

世界選手権大会は、第1回、第2回とも、階級区分の概念はありませんでした。柔道の「原点」への回帰、「本物」の柔道を発信しようとする本大会において、世界選手権大会として無差別の試合が復活したことには大きな意義があります。

無差別の試合が、大会の最後を締めくくる最高の試合の場となることが期待されます。(大会事務局)

世界に挑む、ミズノとともに。



「優勝」ブランドのトップモデル

「優勝」全日本モデル 別注対応/帯別売
合計価格 ¥27,300 (本体¥26,000) (日本製)
上 衣 76MG-00101 ¥19,845 (本体¥18,900)
パンツ 76PG-00101 ¥7,455 (本体¥7,100)

記載価格は、消費税込みのメーカー希望小売価格です。
()内は消費税抜き本体価格です。

資料請求(無料)